

障害学生修学支援に係る新規相談時期と学年進行の関連性 -山口大学の事例から-

櫻井 凜
岡田 菜穂子
柳下 雅子
松尾 理佳
田中美穂
田中 重矢巳

要旨

全国調査によると、高等教育機関では障害や疾病等のある学生数の増加傾向が継続している。本稿では、効率的かつ効果的に学生対応を行うために、相談時期や傾向を把握し、相談体制強化のためのヒントとしたい。具体的には、学生特別支援室での対応実績から、新規で来談した学生の学年と相談時期の関係を整理した。その結果、一般的に想定された修学上の流れに乗れない学生は、学年ごとに特徴のある修学上の課題を抱えている様子が見えてきた。対策として、学年進行とともに求められる修学上のタスクと困難さとを、丁寧に整理・読み解きながら対応を検討していく必要がある。

キーワード

高等教育機関，障害学生，修学支援，相談対応

1 はじめに

日本学生支援機構が毎年実施している「障害のある学生の修学支援に関する実態調査」では、高等教育機関に在籍する障害等のある学生（以下、障害学生）は増加しており、また支援ニーズも多様化の傾向にあることが見て取れる。

本学では、障害学生が修学上の配慮を申し立てることができる「修学支援申請制度」を導入しているが、この制度を利用する学生が年々増加しており、また修学支援の拠点として設置されている学生特別支援室（SSR）での相談対応件数も増え続けている。増加するニーズに応えるための相談対応体制を強化するには、相談対応の集中する時期や、新規での来談者の傾向などを整理しておくことが重

要である。

前稿では、相談窓口の体制強化のためのヒントを得るため、学生特別支援室での障害学生支援に係る相談が集中する時期や傾向を読み解いた（岡田他 2024）。学生特別支援室での相談対応件数と新規相談者数を月毎に集計し、障害種別と併せて分析した結果、相談件数が集中するのは年度初めであり、この時期に新規で相談のある学生の障害種は多岐にわたること、一方、学期開始後1か月ほどで新規の相談が寄せられるケースの多くは精神障害に偏る傾向が確認された。

本稿では、前稿の結果を汲んで、新規での相談が寄せられる時期や傾向の分析を深めるべく、新規相談者の学年と相談時期に注目する。具体的には、山口大学学生特別

支援室での相談対応実績のうち、新規での相談について、学年ごとの件数を相談時期と併せて整理する。これらの結果から、障害学生の修学支援上の困難が生じる時期を把握し、学生対応に繋げることを目指す。

2 学生特別支援室の役割と相談対応の範囲

学生特別支援室は、山口大学の学生対応窓口のひとつで、障害学生の修学支援に係る相談対応およびコーディネートを所掌する障害学生の修学支援の学内拠点である。

学生特別支援室では、障害学生からの相談を受けるとともに、授業担当教員や障害学生の所属学部、他の学生対応窓口等と連携を図りながら修学上の配慮の調整を行っている。支援の実施に際しては、教職員から配慮内容についての問い合わせや確認があることも多く、授業目的と学生の状況を確認しながら、連携して配慮を実施している。

本学では、障害学生が大学に対し、支援を申し立てる「修学支援申請制度」を導入しており、学生特別支援室では、この制度に関する説明や、利用を希望する学生の手続き補助、修学上の課題の整理や有効な配慮方法の検討などを担っている。修学上の対応に関連して、体調や学生生活、進路等、修学以外に関する相談が含まれる場合は、学生の所属学部や他の学生対応窓口を紹介したり、必要に応じて連携して対応するようにしている。

3 新規相談の時期と相談者の学年の関連性

学生特別支援室では、2018年度から毎月、相談対応件数と新規での相談者数を集計している。本稿ではこれまでの対応実績のうち、新規相談の時期と学年の関連性に注目したい。

2020 年度から 2024 年度の学生特別支援室の新規相談者数合計 196 名について、相談者の学年の割合を図 1 に示した。図 1 による

と、新規での相談は、学部生、大学院生（修士）のどの学年でも見られるが、1 年生は全体の約 4 割と最多になっている。次いで、3 年生（約 2 割）が多く、2 年生、4 年生、M1、M2 と続いている。大学院生は、対象とする 5 年間を通してそれぞれの学年で、10 人以下と少数であり、傾向を見ることが難しいため、本稿では学部生に注目して、分析を進める。

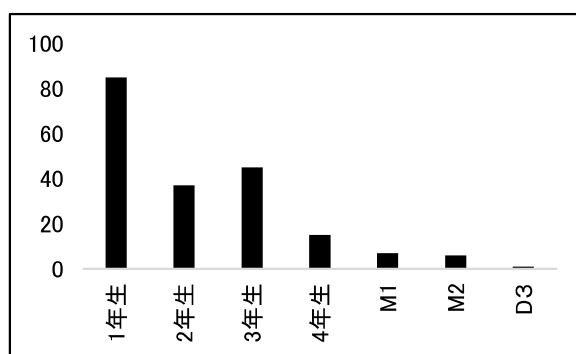


図1 学生特別支援室 新規相談者の学年別の人数（2020年度～2024年度）

2018 年度から 2024 年度の学生特別支援室の新規相談者数合計 253 名について、来談のタイミングを月毎に示したものが図 2 である。図 2 では、新規での相談は年間を通してみられるが、多くが前期開始 4 月に集中しており（約 3 割）、次いで多いのが 6 月（約 1 割）となっている。また、後期授業が開始される 10 月には三番目のピークが確認できる。

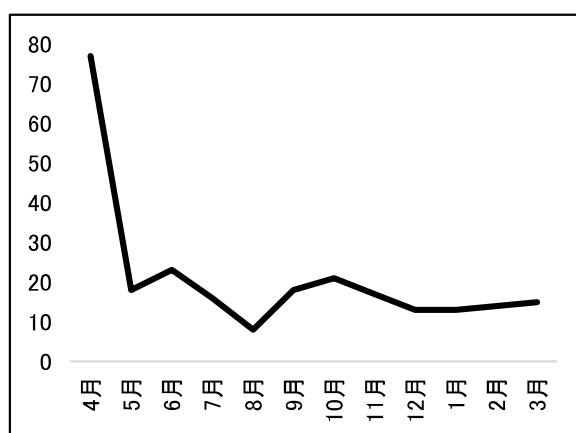


図2 学生特別支援室 新規相談者数（2018年度～2024年度）

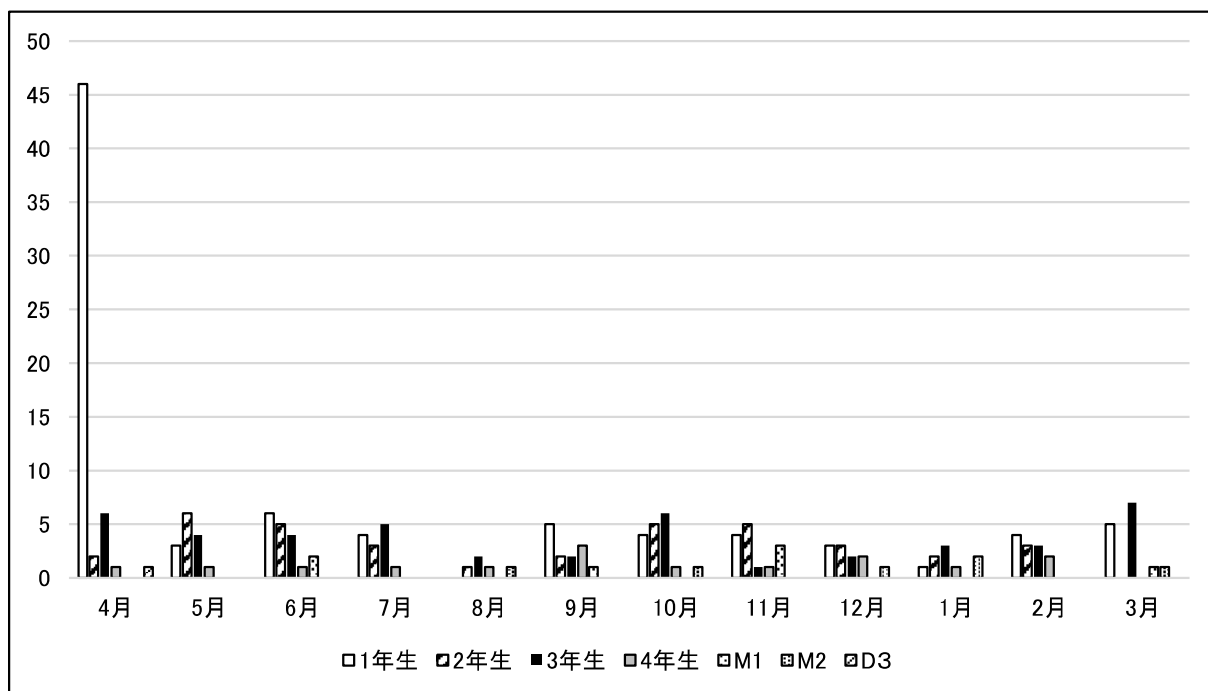


図3-1 学生特別支援室 学年ごとの新規相談者数（2020年度～2024年度）

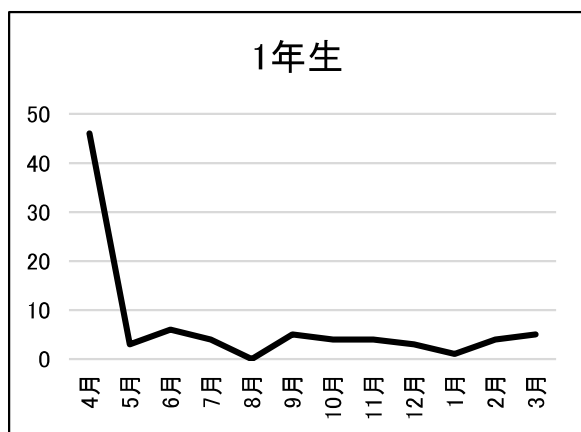


図3-2 新規相談者数（1年生）

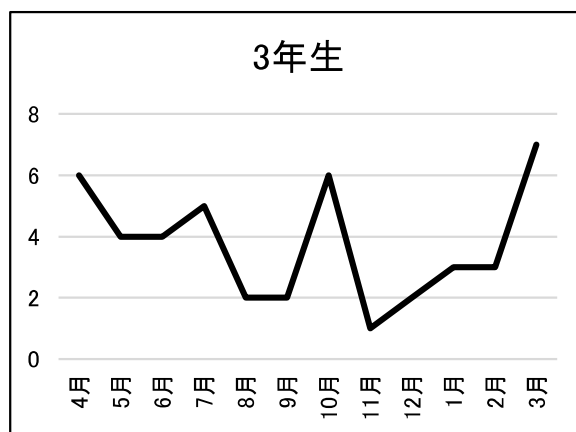


図3-3 新規相談者数（3年生）

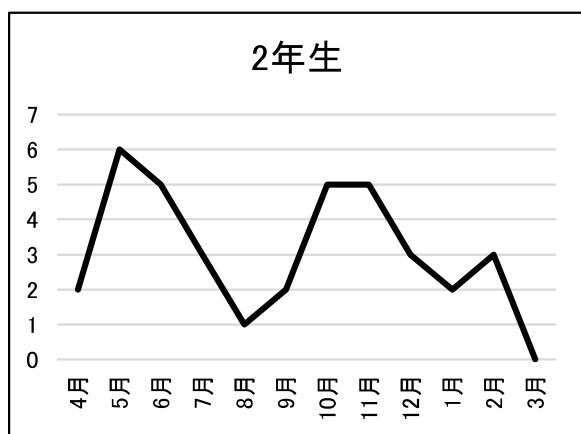


図3-4 新規相談者数（2年生）

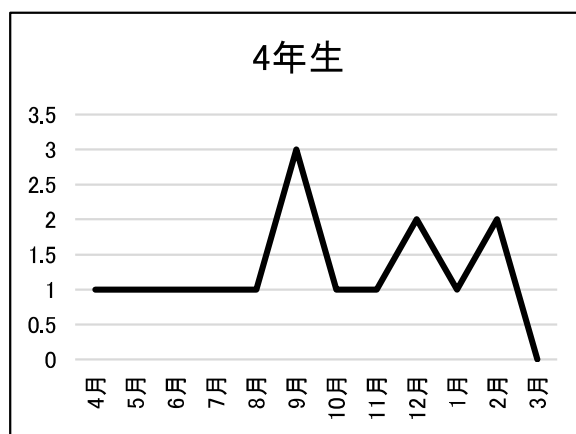


図3-5 新規相談者数（4年生）

図 3-1 は、新規相談者の来談の時期に相談者の学年を照らして整理したものである。図 3-1 の数値を、学年ごとに抜き出して図 3-2 ～図 3-5 に示した。

前述したとおり新規の相談者は 1 年生が最多となっているが、図 3-1 と図 3-2 によると、その多くが 4 月に集中している。全体を通してみても、この 1 年生の 4 月新規相談は突出して多いことが分かる。また、1 年生は 5 月以降も少数ながら新規での相談が確認できる。

1 年生に次いで多い 3 年生は、図 3-3 のとおり年間を通して新規での相談が存在している。3 年生の新規相談のピークは 3 月の 7 名だが、4 月と 10 月も 6 名と多くなっている。

その次に多い 2 年生は、図 3-4 にあるように、年度開始当初の 4 月の新規相談は少ないものの、5 月にピークを迎えている。また、後期の授業開始 10 月と 11 月に 2 番目のピークが確認できる。

図 3-5 には 4 年生の状況を示した。学部生の中で最も新規相談者数が少ない 4 年生は、春から夏にかけて（4～8 月）は相談者数が 1 名と少なく、秋から冬にかけて（9～2 月）相談者数が増え、卒業間近の 3 月では新規相談者数が 0 となっている。

4 学年進行と修学支援上の課題の関連性

図 3-1 から図 3-5 で見た、学年ごとの新規相談者数の傾向を、学年進行に伴う修学上の特徴と関連づけて検討したい。

学生特別支援室は、学内の障害学生の修学支援の拠点であるが、修学支援といっても、学年進行とともにその内容は異なる。修学上の課題となり得ることは、各学年の特徴や修学上の段階と連動していることも多く、そのことが新規での来談時期と関連していることも珍しくない。

カウンセリングの視点から、大学生の生活と課題をまとめた鶴田は、4 年制の大学を想

定し、学生生活を入学期、中間期、卒業期、大学院生期に分類した「学生生活サイクル」という考え方を提唱し、それぞれの時期の特徴と起こり得る課題を提示している（鶴田 2001）。鶴田によると、入学期（1 年生）は、高校から大学生活への移行期間であり、適応上の課題が起こりやすい。中間期（2 年生・3 年生）には、大学生活に慣れてきたところで中だるみに陥りやすいため生活習慣の乱れが懸念されると同時に、人間関係の広がりに伴う対人上の課題が起きやすい。また、修学上は専門教育の入口に当たることから、意欲や意識が問われることになる。卒業期には、学生生活の終了を見据えた、新たな移行期の準備に入る。修学上は研究室での対人関係のなかで卒業研究など高度な教育に身を置く必要が高まる。

鶴田の議論を参考に、本学の修学スケジュールと支援の仕組みを照らして、障害学生の修学上のハードルとなり得る点を考えてみる。

1 年次は、障害学生にとっては大学生活への移行・定着の段階であるだけでなく、支援を大学に引継ぐための移行期間でもある。このことから、年度当初に 1 年生の相談が多くなっているのは自然な現象といえる。

山口大学では、入試に先立って、受験上の配慮と入学後の修学支援について相談できる「事前相談」の制度を取り入れている。最近ではこの事前相談にて、配慮を希望していた学生が、入学後の修学上の配慮を希望して、学生特別支援室につながり「障害学生修学支援申請」手続きを行うケースも多くなっている。学生特別支援室では学部と連携して、修学上の配慮が必要な新入生へ、早期の相談を呼び掛けており、実際「入学の手引」や学生特別支援室のホームページなどを参照して、入学時期に複数の問合せが寄せられるようになってきた。高校から大学へと進学し、移行・定着していく段階で、支援申請を行い、学部関係者等に、状況や必要な支援について

共有することで、修学上の課題への対応や調整を、組織的に行うことが可能になっている。入学期のうち特に4月は、移行期であることを強く意識し、短期間で円滑な支援に結びつけるための体制が必要といえる。

図3-1と図3-3で見たように、3年次は、1年生の次に新規での相談者数が多い。本学の3年次では、多くの学部で研究室活動が本格化したり進級要件が突きつけられたりするという特徴がある。3年次は、2年次に比べ、修学上の分岐点となる事柄が多くあげられることが、2年次に比べ新規の相談者が多い要因の一つとして考えられる。また、3年次は年間を通して新規が存在しているものの、3月がピークになっているのは、進級要件に関する課題が浮き彫りになったことで、相談につながるケースも少なくないためであると推測される。

2年次では、教育の専門化が本格化する。1年次は、共通教育科目の履修がメインとなるが、2年次では学部学科の専門科目の履修が増える。図3-1および図3-4に見るように、2年次において、年度開始当初の新規が少なく、5月にピークを迎えるのは、前期の授業が開始し、授業参加する中で、修学について課題に直面し、学生特別支援室に来室するためではないかと推測される。

「大学生活サイクル」では2年生と3年生が中間期としてまとめられているが、大学のカリキュラムや進級要件の設定、進路検討のタイミング等によって、2年次と3年次のすごし方が変わるため、大学や学生ごとに大学生活上の課題が現れるタイミングには開きがあると考えられる。

4年次では、卒業研究や卒業論文の執筆が修学上の課題として挙げられる。秋から冬の時期（9月～2月）に新規相談が増加していることから、卒業論文・研究の締め切りが迫ってきたところで行き詰まってしまい、学生特別支援室への相談に繋がった可能性を指

摘できる。また、進路検討の段階で障害特性と改めて向き合う過程が必要となり、相談につながるケースもあり得る。

「大学生活サイクル」を参考に本学の修学スケジュールから各学年の特徴を改めて整理すると、1年次は「大学への移行・定着」、2年次の「教育の専門化」、3年次の「研究室配属・進級要件」、4年次の「卒業論文・研究」が修学上の課題となりやすいと言える。障害学生の修学上の課題も、これらと関連している可能性があり、学年進行に伴う修学環境の変化が、障害学生の修学支援上の課題へとつながっていると指摘できる。

一方で、学生特別支援室に新規で相談に来た高年次生の状況を見ると、入学期からの修学上の課題を放置していたために入学期にみられるような課題が深刻化していたり、自己の障害理解や配慮の有効性の検討が十分でないことが時間とともに課題として露見するなど、学年進行に伴う修学上の課題としてのみでは十分にとらえきれないケースも含まれている。この点に、障害学生が直面する修学上の課題の特徴が見て取れるが、詳細の分析については別の機会に譲りたい。

5 おわりに

本稿では、学生特別支援室に寄せられる新規相談での学生の学年と相談時期を整理し、障害学生の修学支援上の困難が生じるタイミングを確認した。その結果、各学年の課題や特徴が来談時期と関連している可能性が指摘された。

新規相談は1年生、3年生、2年生、4年生の順に多かった。相談時期の特徴を学年ごとに整理すると、1年生は最も新規での相談が多く、また特に4月に集中していることが明らかになった。3年生は、1年生に次いで新規相談が多く、相談時期では3月がピークになっている。専門教育や研究室など教育・

指導の形式の変化がきっかけとなった修学への不適応が起こる可能性や、進級要件を満たせないことを契機として相談に繋がるケースが予想される。

このように、大学内の教育環境の変化のタイミングによって修学上の課題が現れる時期や特徴があることが指摘できる。障害学生の修学上の課題は、障害特性から不適応が顕著であったり、学年進行とともに変わる教育環境と障害特性との相性から、それまで想定されていなかった課題が明らかになるなど、特有のニーズが生まれる特徴がある。また、環境適応の苦手さがある学生は、大学が想定した修学上の流れに乗りきれず、課題が長期化・深刻化する事にも留意する必要がある。

修学環境の変化による修学への不適応については、学部や学科の修学環境の特徴が影響していることから、日ごろから大学や学部のカリキュラムの特徴を十分に把握しておくことが配慮の円滑化に繋がる。また、相談窓口では、学生とともに特性の理解を進めておき、来る学年進行の波に備えることが重要となる。学年進行とともに求められる修学上のタスクと、学生の困難さを丁寧に整理・読み解きながら、関係教員や学部事務との連携を取り、状況に柔軟に対応していくことが、学年進行に伴う教育環境の変化への対策となる。

(学生支援センター 学生特別支援室
連携コーディネーター)

(学生支援センター 学生特別支援室
室長・准教授)

(学生支援センター 学生特別支援室
カウンセラー)

(学生支援センター 学生特別支援室
カウンセラー)

(学生支援センター 学生特別支援室
カウンセラー)

(教育学部附属教育実践総合センター 講師)

【参考資料】

日本学生支援機構「障害のある学生の修学支援に関する実態調査」

https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_shogai_syugaku/index.html (2026年1月26日閲覧)

山口大学学生特別支援室ホームページ

<http://ssr.ssc.oue.yamaguchi-u.ac.jp/>
(2026年1月26日閲覧)

岡田菜穂子, 田中亜矢巳, 柳下雅子, 松尾理佳, 田中美穂, 須藤邦彦, 2024, 「高等教育機関における障害学生修学支援ニーズの動向—全国の傾向と山口大学の現状—」『大学教育』21, 64-69.

岡田菜穂子, 櫻井凜, 柳下雅子, 松尾理佳, 田中美穂, 田中亜矢巳, 2025 「障害学生修学支援ニーズと修学スケジュールの関連性・山口大学の事例から」『大学教育』22, 42-49.

鶴田和美編, 2001 『学生のための心理相談：大学カウンセラーからのメッセージ』培風館.